

創造的変革者への道



松村康平

一九六六年「一月」号、巻頭の文である。二十一世紀への歩みのはやまっていくのを感じ、緊張をおぼえながら、叙述を進める。

はじめ、「創造的変革者の道」と題した。そのような道があるならば、それは、創造的変革者たちによって、ひらかるべき道である。そして、この道がひらかれれば、その道は、創造的変革者たちによって、またあらたにひらかれていくための道となる。そのような創造的変革者に、私たちがなることこそ、重要である。創造的変革者への道を歩みはじめて、そのようになることこそ重要である。ここに、「創造的変革者への道」と題して、私たちが、創造的変革者となることへ近づく、その道を明らかにしなければならない。

エーリッヒ・フロム(E. Fromm)は、その著「疑惑と行動」(邦訳名 阪本健二・志賀春彦共訳 創元新社、原著名: Beyond The

Chain of Illusion: My Encounter with Marx and Freud" 1962)において、次のように述べている。

「マルクスにもフロイトにも先駆者はあるが、ふたりとも、その主題を、はじめて科学的精神でとらえたひとたちである。彼らは、社会に対して、また個人に対して、それぞれ、生理学が生きた細胞に対して、理論物理学が原子に対しておこなったことを、なしたのたのである。」

「マルクスは、社会を、相矛盾してはいるが検証可能な種々の力から成り立っている錯雑とした構造物であるとみなした。こうした力についての認識は、過去の理解を助け、ある程度まで未来の予言を可能にする―それは、必然的にある事件が起こる、という意味ではなく、人間がいずれかを選択せねばならぬ、ある範囲での二者択一が存在する、という意味での予言である。」

「フロイトは、精神的存在としての人間が、いくつもの力からなる構造物であること、その力の多くはたがいに矛盾し合い、エネルギーを担っていることを発見した。ここでも、たいせつなのは、これら諸力の質や強さや方向を理解することによって、過去を理解し、将来への二者択一を予言するという科学的作業である。このばあいも、変革は、あたえられた力の構造がゆるす範囲で可能なだけである。」「あたえられた構造の内部的エネルギーを変化さすという意味での真の変革は、この力と、それを動かす法則との深い理解だけでなく、大きな努力と意志を必要とする。」

フロムは、このようにマルクスとフロイトをとらえて、また、次のように述べている。

「懐疑と、真実の力と、ヒューマニズムとは、マルクスとフロイトの仕事の指導的推進の原理である。」「両体系に共通なもう一つの側面は、現実に対する彼らの力動的、弁証法的な接近の仕方である。」

フロムによれば、両者における力動的接近とは、「過去や現在の行動のうわつらにとらわれず、過去の行動の型を生みだした力を理解することにある。」

フロムは、また、次のように述べている。

「フロイトは、社会的慣習の力に対抗する人間の自然的衝動の権利を擁護し、理性がこれらの衝動を統御し、高貴にするという理想を持っていたが、それはヒューマニズムの伝統の一部を形づくるも

のである。」「マルクスは、経済に従属しているため人間がいびつにされている社会秩序に抗議し、また全的な疎外されない人間の完全な開花を理想としたが、これも同じ人道主義的伝統の一部である。」

フロムによれば、フロイトは自由主義的改革者であり、マルクスは急進的革命論者であるが、両者は「ともに、人間を解放しようという不屈の意志と、解放の手段としての真実に対する、これまた強靱な信頼をもち、また、この解放のための条件は、幻想のきずなを断つ人間の能力にあるという信念を、共有していた。」

マルクスも、また、フロイトも、創造的変革者への道をひらいている。そして、フロムもまた、そうである。フロムは、マルクスおよびフロイトとの「出あい」を重んじ、両者を高く評価することのできるフロム自身の立場から、道をひらいている。このような人たちのなかには、ほかに、モレノ (J. L. Moreno) がいる。

第一次大戦からその後にかけて、モレノの心をひいた二つの思想があった。ひとつは、マルキシズムであり、ひとつは精神分析学である。モレノは、二つを相容れぬものとしてとらえたが、共通するものもみていた。それは、既成宗教の否定である。モレノは、しかし、これを否定せず、蘇生させようとした。モレノは、ソシオメトリ (Sociometry) によって、科学なき宗教も、宗教なき科学もなし得ない社会改革を、行なおうとし、またサイコドラマによって、それを行ない続けている。

フロイトとモレノとの「出あい」は、次のようなものであった。それは、第一次大戦前である。モレノが、ウィーン大学精神科で助手をしていたころのこと。

フロイトは、夢の分析に関する講義をおえて、講堂をでる学生たちのなかに、モレノがいるのに気づいた。フロイトは、モレノに、将来の目的についてたずねた。そのときモレノは、次のように答えている。

わたしは、あなたの方向の仕事をさらに進めたい。あなたは、しかし、患者を、自然的でない治療室でみておられる。わたしは、患者に、路上で、患者の自宅で、自然の環境で、会う。あなたは、患者の夢の分析をなさるが、わたしは、患者に、新しく夢みる勇氣を与えたい。

そう答えたモレノは、その後しばらく、実存的、宗教的色彩のつよい詩作活動を行なっていた。これが、モレノの治療法の哲学的基礎となっている。それは、一九一四年ごろであった。その後、一九二二年に、「即興劇場」がたてられた。モレノは、その劇場のサイコドラマの舞台には、精神分析家の寝椅子をのせることができても、寝椅子の上に舞台をのせることはできないであろうとも、語っている。

それから、三十年ほどたっている。モレノの自発性・創造性、役割の理論を主体とする構想が、受けつがれながらも、それとはまた異なる独自の「心理劇活動」が、わが国において、大衆の中に心理

劇場をたてるべくはじめられた。一九五五年の七月である。そして、日本の場合、それは、グループ・ダイナミックス（集団力学）の理論的・実践的活動と切り離せない関係にあり、また、舞台のみでなく、生活用具・文化財を媒介として、展開している。

創造的変革者への道は、こうして日本における心理劇活動によっても、ひらかれた。学校における道徳教育の技法として「劇化」といれられている。これが活用されれば、創造的変革者への道はいく人たちが、ふえるはずである。

フロイトとモレノと私たちとで、その理論と技法がどのように関連し、またそれぞれ、どのように相違しているか、次に述べよう。

フロイトにおいては、治療場面における治療者・患者の、二者関係の認識に基づき、患者に即した一者関係の技法が、主として展開される。それは、自由連想法と呼ばれ、患者の過去体験が重視されている。

モレノにおいては、治療場面における監督および補助自我・演者・観客たちの、対人関係の「内的認識」に基づき、患者に即した二者関係の技法が、主として展開される。それは、ロール・リバーサル (Role reversal)、ダブルリング (Doubling)、ミラーリング (Mirroring) などと呼ばれ、患者の現在（および過去）体験が、重視されている。

私たちにおいては、教育・治療関係における監督および補助自我

・演者・観客の、対人関係の内・外的認識に基づき、教育・治療関係に即した三者関係の技法が、主として展開される。それは、トリプリング (Tripling)、焦点化の技法、拡散化の技法、マーケティング (Marketing) の技法、その他であり、また、併用される技法として、小集団運営の技法であるバス法、相談技法のひとつである三者面談法などがある。そして、患者の現在および未来体験が、重視されている。

フロイトは、以前を・ここでの原則に立ち、モレノは、今は・ここでの原則に立ち、私たちは、今・ここで・新しきの原則に立っている、ともいえる。

私たちは、フロイトよりもモレノに、近い。フロイトは、より個人的であり、モレノと私たちは、より対人関係的である。そして、私たちの理論的立場は、モレノもフロイトも体系内に矛盾なくとり入れて位置づけることができる。そして、また、私たちとマルクスの近さのほうが、モレノとマルクスより近い。しかし、モレノとマルクスのどちらかといえば、私たちはモレノに近い。モレノと私たちは、マルクスにおいてまだ展開されなかった対人関係の科学的研究に立脚している。

マルクスとフロイトの、どちらともちがう第三のもの。それは、モレノであり、私たちであり、そして、フロムでもある。

フロムは、「社会的性格」について述べている。これは、個人的性格が同じ文化に属するひとのあいだでもたがいに異なっているの

とはちがい、同じ文化に属するほとんどのひとによって分かちもたれている性格構造の核である。そして、社会的経済的構造と、社会にいきわたっている理念や理想のあいだにある中間体。これは、第三者である。

第三者の認識は、このほか、たとえばマルチン・ブーバーにおいても、成立している。しかし、フロムも含めたそれらの人たちに置いて、それは、二者関係の認識がもたらす第三者の認識であった。

この第三者の認識が可能となっている「関係状況」に即した認識は、三者関係的となるはずである。

関係状況において展開する「関係」には、対人関係・対物関係・対自関係などがある。それらの関係が、媒介し合う関係についても、三者関係の認識を成立させ、三者関係的技法を用いることによって、関係の発展が著しく促進される。この認識と技法は、創造的変革者への道をひらく。

「誘導保育」で、創造的変革者の道を歩んだ倉橋惣三は、子どもは先ず教育者に教えて、それが自分を教育させるといふ。二者関係的認識に立ち、対象に即して目標を実現する。これを、三者関係的にとらえなおすとき、そこにも、創造的変革者への道はひらける。

*

*